

☆都議選結果

☆ワルシャワ市議団来日民社

☆新人議員紹介—福岡宗也

第32号 1997年8月1日

(平成7年3月17日第三種郵便物認可)

月刊

# 民社

発行 民社協会

編集発行人 梅澤 昇平  
〒105 東京都港区西新橋1丁目20番9号  
和田ビル4階  
TEL (03) 3501-5111 毎月1回1日発行  
購読料 年間 2,000円  
(会員の購読料は会費の中に含む)

## 尖閣の重要性を認識し、 中国への態度を改めよ

衆議院議員  
民社協会理事  
西村 眞悟



5月6日、私は尖閣諸島魚釣島に上陸した。尖閣の問題は、「東アジア」という避けがたい潮流のなかで、日本の存立に関わる問題である。近未来的には北朝鮮の崩壊がある。ただし朝鮮半島に関しては、50年前の戦争でコミットしすぎた轍を踏まないためにも、われわれは距離を置かねばならない。そして国際協調

体制を整えるなかで、情緒的な反応を排すだけで対処できると思う。しかし尖閣に関しては、対大陸中国との間の問題であることを認識すべきである。

膨大な人口と面積を誇る大陸中国を突き動かしているのは「中国共産党」という共産主義と独裁権力である。中国の歴史は、分裂しては統一王朝に向かうという繰り返しだ。分裂の多様性が発揮されているときには強権あるいは中華ナショナリズムによってこれを統合する。天安門事件以降も中国は、武力でこれを鎮圧しながら中華ナショナリズムをもってその統合を図ろうとしている。それは大陸の西においてはチベット、ウイグル、モンゴルで、また海洋においては海洋覇権主義という形で姿を見せている。尖閣はまさにその象徴だ。

中国は昨年3月、ミサイル3発を台湾沖に撃ち込んだ。これは「力の空白があれば台湾併合実現のため直ちに動く」という武力威嚇に他ならない。2隻の米空母が急行し断固たる対抗の姿勢を示したため、中国は表玄関からの台湾の併合を当分諦めたが、代わりにウラ玄関からの台湾併合を図っている。中国が尖閣を領有すれば、台湾は外堀を埋められた城同然だ。同時にこの地域は、海洋アジアの国々を結ぶ“海の回廊”にある。世界の富の40%の物資が、多くを日本を起点あるいは終点として往来している。大陸中国の最も工業と経済の発達した地域から、日本のシーレーンを切断して直ちに西太平洋に抜けられる地域なのである。

中国の領有権の主張は石油資源がきっかけだったが、日本という、世界第二の経済規模を持つ国家の命運を握る場所を支配することで海洋アジアを支配することにある。中国はここで海洋調査船による調査を行い、石油資源だけでなく潜水艦の水路まで探査している。日本が50年前の戦争で壊滅したのは、この地域において潜水艦によって輸送船を撃沈されていたからだ。ここを取られれば日本の命運が握られ、そして台湾の運命も決まる。

中国の領有の根拠は、500年前の航海図に尖閣の島の記載があるということだ。文化的領域をもって近代国家の領土を確定するという中華思想独特の独善的な主張である。中国はこの主張を堂々と南シナ海と東シナ海で行いかつ実行している。南シナ海ではフィリピンの米軍基地撤退による“力の空白”のため、東シナ海では中国の被害者プロパガンダ、すなわち憎悪をもって日本に対処しわが国がそれに陥れられているためだ。わが国が50年前の戦争で中国に被害をもたらしたことに対する憎しみがある。この被害者の要求に、わが国は国家としての決着を付けたにもかかわらず情緒的にこれに乗った。味を占めた相手方は憎悪を絶え間なく再生産している。

しかしわが国は、そろそろこの中国の毛沢東以来の戦略から脱却すべきではないか。毛沢東の戦略は国民党蒋介石を打倒することであった。毛沢東が延安に追い詰められるまで、そして日本の敗戦後に国民党と戦って大躍進して文化大革命にいたる間、中国共産党・毛沢東は8千万人とも言われる大粛清をしている。これほどの大殺戮を経てなお権力を握る中国共産党にとって一番恐いのは、自らに向く憎悪だ。中国における革命は、常に農民の蜂起という権力に対する憎悪によって繰り返されてきた。毛沢東の共産党も然りだ。そしていずれ共産党も同じように倒れるだろう。しかし当面その憎悪を転嫁する対象として日本が存在するならばそれを利用しない手はない。そして日本はそこにはまった。この状態が、日本が東シナ海において中国に弱腰である現時点での状況であった。私はどうしても尖閣の重要性ということの起点に“ウェイクアップ”していただきたかった。日本はそろそろ、この中国に対する態度を変更しなければならぬときにきているのではないか。

アジアは一つではなく、ブラックホールのような、共産党一党独裁政権に支配された中国大陆がある。しかしアジアはその大陸中国以外に“海洋アジア”つまりASEANの世界がある。このASEANの世界こそが、中国のブラックホールを放っておいても、わたしたちのアジアの多様性を成し遂げる地域であろうかと思う。尖閣でわが国が国家としての当然の務めを果たし、膨張する中華ナショナリズムに歯止めを加えて、彼の国を節度ある安定に収めるならば、台湾は必ずわが国とともに海洋アジアの一つの国として歩んでゆく。そしてそのときにフィリピンからインドネシア、マレーシアにかけての海洋アジアは、必ず自由と民主主義の下で多様性を発揮しながら発展するだろう。

6月13日 月例研究会より (要旨)